書評

完結をみた O'Neill 伝記

近田小一

Louis Sheaffer 著

O'Neill, Son and Playwright

(Boston : Little, Brown, 1968)

O'Neill, Son and Artist

(Boston : Little, Brown, 1973)

Gelb 夫妻の *O'Neill* (New York : Harper & Brothers, 1962) 以来久しく待たれた大部の O'Neill 伝記（計二巻）が完結をみた。著者は多年ジャーナリズムで活躍した劇評家で同時に O'Neill 劇のいくつかの上演を推進した press agent でありこうした活動が O'Neill その人の伝記を手がける端緒となったようである。第二巻 *O'Neill, Son and Artist* がまとめあげられるまで著者は素材の蒐集や整理調査に合計十数年を費したという。この歳月と努力が両巻合はせて本文で1150余ページの大著となって結実した。ここではこれら二巻の伝記をまとめてとりあげ第一巻の要所をふりかえりながら，主として第二巻の内容に重点をおいて眺めることにしたい。

第一巻 *O'Neill, Son and Playwright* は O'Neill の最初の長篇劇 *Beyond the Horizon* の初演（1920）に至るまでを扱っており，ここには諸所にわれわれの興趣を呼ぶ知られざる“事実”が織り込まれている。例えば O'Neill 自身とは直接の関係はないにせよ，若い日の Robert Frost が当時の人気俳優の父 James をその楽屋裏に訪ねてくる場面（p. 43）や，衆前で余儀なく“The Congo”を咏唱させられる Vachel Lindsay が，当り役 Monte Cristo を演じ続ける James と引き合いに出されているところ（p. 43）など。さらに章が進んで *Beyond the Horizon* がブロードウェイで上演される直前の

若い O'Neill の不安, 苦悩, そして希望の模索等は彼が当時の糟糠の妻 Agnes に書き送った手紙が引用されて劇的に描き出され, こうして "dark man" O'Neill に新らたな照明が当てられている。

Sheaffer は従来試みられたどの伝記よりも深く O'Neill 劇の中に踏み込んで, ここに彼の論証の根拠を見出そうとしている。それらの劇の製作過程や上演事情を詳細に語った上で, O'Neill の私的な生活と彼の作品の世界とを一体不離のものに結びつけようと努める。その一例をやや長文であるが眺めてみよう。

> *Beyond the Horizon* contains various elements, more or less transformed, from O'Neill's history. Its central situation, first of all, is similar to the one in which the author, John Reed and Louise Bryant found themselves: the two men well disposed toward one another, almost like brothers, in love with the same girl, who favors now one, now the other. The author's experience with tuberculosis is a second element. Again, the hero's father (named James, by the way), a vigorous father, suggests James O'Neill's peasant feeling for land. In yet another parallel, Mr. Mayo's anger toward Andrew for quitting the farm recalls Mr. O'Neill's unhappiness that Jamie at bottom rejects the theater. *Horizon*, finally, is autobiographical in its portrait of Robert Mayo, a weak, talentless O'Neill, a dreamer haunted by images of faraway places but without the playwright's drive, his great need to express himself, to communicate his austere view of life. (第一巻 p. 418.)

このように O'Neill 家の人びとをその劇作品の中に探索し, そこから O'Neill その人の核心に迫ろうとする著者の追求は執拗といえる程ひたむきである。しかし同時に伝記作品としての本書の問題点がここに浮び上る。芸

術における虚構の真実性と生の伝記的事実とが無原則に混同されがちとなるからである。二巻を通じて著者がしばしば最終的な論証の詰めとして依拠する，O'Neill の劇作後期の最も自伝的な要素の濃い作品とされる *Long Day's Journey into Night* (1941年作) のとり扱い方においてこの感が一層強くなる。事実この作品が，1912年当時の O'Neill 一家を再現していることは論議の余地がない。しかし作中，兄 Jamie から "Mama's baby and Papa's pet !" (London : Jonathan Cape, p. 144.) と呼ばれる世間慣しない youngster の Edmund の原型である O'Neill 自身は，当時すでに結婚の経歴があり一児の父でもあった。著者はこうした重大な創作上の改変は余り意に介していないようである。それのみか同劇の台詞の内容を一つ一つをあたかも揺ぎない生活上の事実そのものであるかのように受けとめている箇所もある。こうした疑問や批判は他の O'Neill 伝記の場合にも程度の差こそあれ生じてくるのであるが，この伝記では両巻を通じてこの感が一層強い。

著者は第一巻の序文中に "... O'Neill was one of the most autobiographical playwrights who ever lived ...." と述べており事実その通りであるが，本書は勢い次のような疑問をひき起す。「作中人物は作家自身の実生活上の人物たちのいわば replica に過ぎないのか，」「O'Neill 劇には芸術作品としての独立した autonomous な実質は見出しえないのか。」本書二巻を通じてこれに対して満足できる答えは見出せないようである。

第二巻 *O'Neill, Son and Artist* は *Beyond the Horizon* の上演成功を節目として華々しく登場しアメリカ演劇開花の道を先導する O'Neill をその死に至るまで追求する。ここでの著者の一貫した視点は人間 O'Neill の興味ある二面に据えられる。その一つは高邁不覇の劇作家としての O'Neill を追う眼である。若くして神に背を向けた O'Neill が神に代わるべき魂の拠り所を，自己が "belong" できる聖域を，ギリシヤ演劇理念の現代劇での再現の努力の中に見出そうとするひたむきな O'Neill の姿を追い求める眼である。そして他の視点は家庭人 O'Neill の精緻な観察である。すべての生活上の責

任の一切を妻や周囲の人びとに転稼しなければ生きていけない夫，母の臨終にも看取ることができない息子，総じては現実の重さ厳しさに直面することができない，傷つきやすい要介護の人間を確かめようと迫る眼である。二巻を通じて一貫しているこの人間のいわば高低両極限に巾広く及ぶ視野は，他の伝記に比肩できるものはない。

しかしそれと共に重要な問題点がある。O'Neill の私生活へのより透徹した分析過程が薄弱なことである。事実この劇作家の人生態度の基本的特徴の一つは本書自体の中で，彼の三度目の妻でその死を看取った Carlotta によって次のように指摘されている。"Gene was never shocked at *what* people did. He was only interested in *why* they did it." (p. 44. イタリック部原文通り。) 従ってこの O'Neill 像を浮き彫りにするには当然彼の行動の分析的な考察による原因の解明の分野が開けなければならないが，本伝記でそれは望めそうにない。ここで興味の対象として Travis Bogard の最近著 *Contour in Time* (New York: Oxford Univ. Press, 1972) が挙げられようが本稿でこれに立ち入る余裕はない。ただここでは同書は O'Neill の作品群を系統的に考察しながら，これらを作者の実生活の発展と照らし合はせて解明しようとした努力の有力な成果であるように思われることを付記するのみである。

本伝記の他の一つの特徴は第二巻が前述の Carlotta の死去 (1970) 後に完成されたことから生じている。それまで未発表のより所を最大限に彼女から入手し活用すると共に，彼女の死によってその関連記述に保留や遠慮が無用となった利点は大きい。われわれの大きな関心をこめた疑問「Eugene と Carlotta は何故に如何にして結ばれていったのか」はここでようやくその答えを見出せるように思われる。

著者は両者の求愛——結合が必然であったことを解明してみせようとする。つまり二人ともに満たされない家庭での生育歴の所有者であり，共通した不安心理を持ち，永久に結ばれ合う異性を求めて遍歴の果の出合いであった経緯をわれわれに詳しく提示する。

二人の出合いの初め頃 O'Neill が Carlotta に見出す特質は示唆的であろう。著者は当時の妻 Agnes の証言を次のように示している。

"...he (O'Neill) said that she (Carlotta) had eyes like his mother's." (p. 217.) さらに知人のある女性の印象として次のように示している。"... Carlotta's talent as a homemaker was one of the factors that eventually won over O'Neill." (p. 229.) これらはともに放浪の子 O'Neill が求めてやまないよるべではなかったか。O'Neill が後日その魂の安住を得た"母"の保護と献身に深い感謝を込めて Carlotta に送ることば"I mean it as a tribute to your love and tenderness which gave me the faith in love...." (*Long Day's Journey into Night* の冒頭におかれた献辞) はここで初めて深い真実味を帯びてくる。これは本書の最も生彩あふれる記述の一つであろう。

今日までわれわれはいくつかの O'Neill 伝記を手にすることができた。しかしそこに盛り込まれている判断や評価は勢い主な材料提供者の方に傾むくケースも見うけられ，またそれぞれ独自の特徴を持ちながら，概して O'Neill その人の像は酷しく否定的な面が大写しにされる傾向があった。Sheaffer の伝記はそれらに比して多面的な素材源を慎重に駆使して，人間 O'Neill にきめ細かな観察の目を向けている。その描出には精密さと公正を心がけた跡がうかがわれる。O'Neill についての諸所にみられる人物評言も簡潔で控え目なものであるが，決して微温的なものに堕していないのは著者のそうした入念なアプローチによるものであろう。

両巻を通じてその典拠の多彩さと厖大さと共に，引用事項の選択，配列に苦心の跡をしのばせる。またこれら引用の出所は巻末にそれぞれ明示して読者の便益に供している。さらには二巻共につけた"Son"を含む標題は本伝記の内容と意図を雄弁にわれわれに示唆するものである。著者はどこまでも単なる事実の集積に意を注ぐことなく，反面また偏った心理学的独断も避けながら，人間 O'Neill の内面にさぐりを入れる。この探究の姿勢が二巻の全章を貫いており，興趣の尽きない好著といえるであろう。 (1975. 1. 31)